〈在外研修報告〉

新北米大学事情

―U・B・Cとアメリカの大学―

平井俊榮

はしがき

昭和五十一年度の在外研修を命ぜられた筆者は、カナダ・アメリカ・ヨーロッパ・インドの各地を歴訪し、先般帰国した。この間、昭和五十一年四月から九月までの約半年、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学をはじめ、アメリカ西部のカリフォルニア大学バークレー、中西部のシカゴ大学、ウイスコンシン大学、東部のイエール大学と、アメリカ各地を代表する大学を訪れた。とくにブリティッシュ・コロンビア大学には約四カ月滞在し、共同研究者として親しく教授たちの指導を受けるかたわら、キャンパスの中の学生寮に起居してつぶさに学園生活を見聞する機会を持った。そこでブリティッシュ・コロンビア大学（以下U・B・Cと略称）を中心に、北米の大学における仏教研究の現状や、大学生活の種々相について、筆者の見聞した事実をいくつか紹介してみようと思う。

一　U・B・Cのこと

(1)　背景

U・B・Cはカナダ大平洋岸に位置するブリティッシュ・コロンビア(British Columbia)州の州立大学で、B・C州の工業・交通・教育の中心地であるバンクーバー（Vancouver）にある。バンクーバーは、北バンクーバー、西バンクーバー、ニューウエストミンスター、バーナビイ、およびリッチモンドの衛星都市を含めてグレーターバンクーバーと称し、人口約百万、カナダ全土で三番目の大都市で、カナダで最も美しい町だといわれている。五十一年五月末から二週間にわたって、国連による今世紀最大の国際会議とうたわれた世界環境居住会議（Habitat）がバンクーバーで開かれたのは、おそらくこうした素晴しい環境によるものであろう。この百万バン

クーバー市民が限りなく誇りにし、愛着を持っている大学がU・B・Cである。U・B・Cは、一九一〇年創立の比較的歴史の新しい大学であるが、モダンなデザインの凝ったゴシック様式の建物と超近代的なビルが美事に調和した、北米大陸でも最高の美観を誇る大学の一つである。市の西郊バンクーバー湾に大きく突き出た巨大なポイントグレー(Point Grey)という岬全体が大学の所有地で、うっそうとした森林やユニバーステイヒルと呼ばれる高原、多数の公園やゴルフコース、海水浴場までも含むその総面積は三千エーカーにも及んでいる。これは実に日本の皇居の九倍の広さである。大学の建物のある実際のキャンパス部分だけでも約千エーカー(百二十三万坪)を占め、これだけでも駒沢大学の全敷地面積(一万五千坪)の八十二倍に相当する。しかも学生数はほぼ同数の約二万人である。こうした大学の立地条件が、後述するように図書館などの勉学施設ばかりではなく、スチューデント・ユニオンや学生寮といった福祉施設を高度に発達せしめることになるのであろうが、勉学や学内生活のための施設の立派さ、それにともなう自由で巾広い勉学の仕組み、開放的な雰囲気というのは、U・B・Cに限らずアメリカのどの大学にも共通して感じられたことであった。ことにカナダは国土そのものが超過疎の国である。面積はソ連に次いで世界第二位、日本の二十七倍であるが、総人口はわずか二千三百万人に過ぎない。全人口の四十五%が英国系、三十%がフランス系で、残りがアジアその他系の移民によって構成されている。その点アメリカと同じように移民の国であるが、アメリカが人種のるつぼと称されるように、雑多な人種が混然と融合して等しくアメリカナイズされる傾向があるのに対して、カナダは文化的モザイクの国であるといわれている。これはカナダの移住者がそれぞれの母国の文化・伝統を受け継ぎ、それを守り育てていることである。カナダ文化の特色はこうしたマルチカルチュアリズム(多様文化主義)にあり、カナダ政府も積極的に多様文化の発展を推進している。したがって、カナダは異文化に対してきわめて寛容な国であるといえるが、こうしたお国柄に加えて、大平洋をへだててアジアに対しているB・C州では、古くからアジアや日本とは特別関係が深く、現にバンクーバーは日本の横浜と姉妹都市の関係を結んでいるが、その中心大学であるU・B・Cも伝統的にアジア研究の盛んな大学として知られている。

(2)ニトベパークとアジアセンター

このことを象徴する戦前・戦後の二つのエピソードがある。一つは、戦前U・B・Cで客死した新渡戸稲造博士(一八六二―一九三三)を記念してつくられた純日本庭園の新渡戸記念公園(Nitobe Memorial Park)の存在である。新渡戸博士は、学

者・教育者として著名であったばかりでなく、国際平和主義者として戦前の国際連盟事務局次長をもつとめ、晩年アメリカ大陸講演旅行の帰途U・B・Cに立ち寄り客死したのである。時のU・B・C総長とは若き日のヨーロッパ留学で親友であったと聞く。こうした機縁で創設されたのが新渡戸公園であるが、時代は丁度満州事変を機に日本が世界の孤児になりつつあった時で、敵性国家の庭園を学内に作るなどということはおよそ日本では考えられないことである。今日では園内の整備も行きとどいて、海外における最も本格的な日本庭園として、毎年一万人以上の観光客が訪れるB・C州の名所となっている。庭園内には茶室もあり、筆者の滞在中にも、日本国際文化協会、U・B・C、バンクーバー裏千家支部の共催で、盛大な茶会が催されたのも記憶に新しいことである。

今一つの特筆すべき出来事は、この新渡戸公園の前のもと駐車場の敷地に、現在三百五十万ドル（十億五千万円）の予算で建設中のアジア文化センター（Asian Center）の設立である。このアジアセンターのひときわ注目を引くピラミッド型の屋根は、実は一九七〇年大阪万博の際に、「日本の心」と名づけられた三洋電機パビリオンの屋根を移したものである。この国際的にもあまり前例のない壮大なプロジェクトは、U・B・C仏教研究室の飯田昭太郎教授の発願になる超人的努力によって実現したものであるが、一九七三年十二月に第一段階の募金百六十万ドル（四億八千万円）（日本側・万博協会二十五万ドル、経団連五十五万ドル、カナダ側・B・C州政府四十万ドル、オタワ連邦政府四十万ドル）の完了をみて、工事が着工されたのである。筆者が訪れたときは、丁度石油ショック後の資材費の高騰で工事を一時中断していたが、その後U・B・Cの当局によって残りの資金のめどもつき、工事も続行されて、明年の夏には完成の予定と聞いている。完成の暁には五十有余の研究室、アジア文化研究所、二十万冊に及ぶインド・中国・韓国・日本の諸文献を蔵するアジア図書館、三百人収容の劇場、展示場、東洋人パイオニア記念室等を含む地下三階、地上二階の一大総合文化センターが出現するはずである。カナダ一を誇るU・B・C各分野のアジア研究の学者は、総勢三十余名にも達すると聞いているが、彼らにとっては大きな福音となるであろう。それにしても、いかにカナダが多様文化主義を国是としている国であっても、U・B・C当局の英断がなければこのような企てが成功するはずもなかったであろう。将来同センターの管理運営はすべて、大学の続く限り、U・B・C当局によってなされるとも聞いている。筆者はここにもU・B・Cとアジア、殊に日本との間の深い因縁を思ったのである。

こうしたU・B・Cにおけるアジア研究の伝統を背景にして、カナダは勿論、北米の大学でも有数の存在として聞えて

いるのがU・B・Cの仏教研究室である。

(3)仏教研究室

筆者が、在外研修の最初の寄留地としてU・B・Cを選んだ理由の一つは、ここには比較的筆者と専門の近い仏教学者が三人もいたからである。すなわち、Leon Huvitze, Arthur Link, Shotaro Iida の三教授である。主任の Leon Hurvitze 教授は、中国天台の研究家で、絶版になっているが学位論文『智顗』"CHIH-I, A introduction to the life and ideas of a Chinese Buddhist monk" (Bruges, 1960) を公刊している。また非常に優れた linguist で、九ヵ国語（英・独・仏・梵・巴・蔵・中・日・蒙）を自由に読み書き話すことができる。京大の人文研にも学んだ知日家で、もとシアトルのワシントン大学におられたが、近年U・B・Cに移られたものである。Arther Link 教授は、U・B・Cの仏教研究室では最も古く、中国南北朝時代の仏教・道教の研究が専門で、梁慧皎の『高僧伝』の英訳をすでに数年前に完成されている。筆者は、同教授宅のカクテルパーティに招待されたときその原稿を拝見させていただいたが、綿密な註記を施した大部の研究であった。公刊が待たれる次第である。教授は、西バンクーバーの景勝の地に、隠者のような生活を送っている独身の典型的な英国紳士である。Shotaro Iida 教授は日本人で、東北大学の出身で京都大学にも学び、渡米してウイスコンシン大学で故 R. H. Robinson 教授から Bhāvaviveka（清弁四九〇—五七〇）の研究で最初にPh・Dの学位を得た人である。現在U・B・Cでインド・チベットの大乗仏教を中心に講義を行っている。サンスクリット・チベットのほかに、中国語も堪能で、中国仏教や日本仏教までカバーする巾広い精力的な研究活動で知られる。アジアセンター創設の最大の功労者であることはすでに述べた。

筆者がU・B・Cを訪れたとき、この三教授に大学院生も加えて、中国仏教における空思想の受容に関する共同研究が持たれていた。具体的にいえば、宋荘厳寺曇済の『六家七宗論』（欠本）が典拠とされる空思想の理解をめぐる「六家七宗」の研究で、日本南都の三論学者安澄（七六三—八一四）の『中論疏記』をテキストに用い、週一度の輪読・研究・討議の会を持って、『疏記』中の「六家七宗」に関する資料部分の英訳と註記を行ったものである。この共同研究は近く公刊される予定と聞いたが、U・B・Cの仏教研究室で院生も加えてこのような研究がなされていることに、筆者は或る種の驚きと、大いなる親近感を抱いたのである。

U・B・Cの仏教研究室は、文学部の宗教学科（Religious Studies）に属しているが、文学部には別に日本学科（Japanese Studies）や中国学科（Chinese Studies）もあり、さらに東洋学

科（Asian Studies）があって、仏教の教授は Asian Studies の教授も併任している。大学院の仏教専攻のプログラムは、Religious Studies ではなく Asian Studies に属しており、仏教の研究でM・AもしくはPh・Dの学位を得ようとする場合、これを与えることができるのは Asian Studies である。つい先年まで、U・B・Cの教授として高名な評論家の加藤周一氏が日本文学の講義をしていたことがある。このとき学部の学生で同氏の「一休宗純の文学」を聴講した Mrs. Sonija Arentzen という婦人が、大学院では仏教の専攻を志し、飯田教授の指導で（Ikkyūsojun: A Zen Monk and his Poetry）というテーマでM・Aの学位を得ている。彼女はさらに来日して、花園大学の市川白弦教授の指導を受け、近くPh・Dの学位を取得する予定であると聞いた。

また、筆者の滞在中、六月二十九日に、Asian Studies の仏教セミナーから数年ぶりにPh・Dの学位を取得した Neal A. Donner 氏の最終口述試験が行われ、これを傍聴する機会を持った。彼は Hurvitze 教授の指導で天台智顗（五三八―五九七）の『摩訶止観』の英訳（The Great calming and contemplation of CHIH-I）によって学位を得たのであるが、当初は道元の研究を志したほど坐禅に打ち込んだ学生で、学位論文作成のため来日した折にも京都の安泰寺や永平寺に安居している。学位取得後は、アメリカ・ヴァージニア大学講師に赴任すると聞いた。

ところでU・B・Cでは、学位論文の最終口述試験はすべて公開であり、そのための専用の部屋が用意されていて、大学院博士課程の学生は誰でも聴講できる。口述試験の審査員は Chairman（議長）のほか五名、計六名。このほかに External Examiner というのがあって、口述試験に立ち会うことはないが、広く学外の専門家にもその論文を送付して審査を依頼するのである。彼の場合はアメリカ・ハーヴァード大学の Masatoshi Nagatomi 教授が External Examiner であった。教年に一度あるかないかの機会に恵まれ、とくに出席を許された延々二時間半に及ぶこの公開の最終口述試験は、筆者にとってすこぶる興味深いものがあった。

近年U・B・Cでは、単に学部の宗教学科で仏教を勉強したものばかりでなく、日本学科や中国学科、さらには東洋学科で、日本語や中国語をマスターした学生が大学院に進学して仏教を専攻するケースが増えており、これらの学生たちは、その豊かな語学力を駆使して直ちに日本仏教や中国仏教の研究に専念することができるのであって、こうした傾向は、U・B・Cに限らずアメリカの大学でも共通して見られる現象であった。アメリカやカナダの大学における仏教研究は、今や一握りの篤学の士による特殊な現象ではなく、巾広い裾野を持った社会的現象となっているのである。

二　北米大学の仏教研究

(1)概観

一九六一年アメリカ・ウイスコンシン州のマジソン（Madison）にあるウイスコンシン大学で、北米の大学ではじめて仏教の専攻課程が開かれ、仏教の研究によってPh・Dの学位が授与されるようになって以来、十数年の間に相次いで多くの大学が仏教のプログラムを開設し、専攻課程を持つに至った。そこで今、アメリカ・カナダの大学で仏教のプログラムを開講している大学は一体どれ位あるのか、またその中、専攻課程を有する大学はどことどこなのか、参考までにこれを地域別に一覧表にしてみると次の通りである。

（大学名の上の＊は、M・A及びPh・Dの専攻課程を有する大学である。併記した研究者は、仏教、とくに中国仏教・日本仏教を中心に、その大学に所属する著名な教授を思いつくまま挙げたに過ぎない。（　）は専攻分野、または所属部局である。）

A、アメリカ

一、東部

大学名	所在地・州名
＊(1) イエール大学 (Yale University)	New Haven, Conneticut
a. Stanley Weinstein (*Sino-Japanese*)	
＊(2) ペンシルヴァニア大学 (University of Pennsylvania)	Philadelphia, Pennsylvania
a. Derk Bode (*Chinese Studies, Chinese Philosophy*)	
(3) ペンシルヴァニア州立大学 (Pennsylvania State University)	University Park, Pennsylvania
a. Cheng-Chi Chang (*Chinese Buddhism, Kegon*)	
＊(4) コロンビア大学 (Columbia University)	New York, New York
a. Philip Yampolsky (*Sino-Japanese. Zen*)	
b. Yoshito Hakeda (*Sino-Japanese, Shingon*)	
c. Alex Wayman (*Indo-Tibetan*)	
(5) バッファロー大学 (State University of New York at Buffalo)	Baffalo, New York
a. Kenneth Inada (*Indian*)	
(6) スミス大学 (Smith College)	North Hampton, Massachusetts
a. Taitetsu Unno (*Sino-Japanese*)	
＊(7) ハーヴァード大学 (Harvard University)	Cambridge, Massachusetts
a. Masatoshi Nagatomi (*Harvard-Yenching Institute*)	
(8) デューク大学 (Duke University)	Durham, North Carolina

二、中西部

＊(9) ウイスコンシン大学 (University of Wisconsin)	Madison, Wisconsin
a. Minoru Kiyota (*Sino-Japanese, Shingon*)	

b. Stephan Beyer (*Indo-Tibetan*)

c. Geshe Sopa (*Indo-Tibetan, Mādhyamika*)

*(10) シカゴ大学 Chicago, Illinois

(University of Chicago)

a. Joseph Mitsuo Kitagawa (*History of Religions*)

三、西部

*(11) カリフォルニア大学・ロスアンゼルス Los Angeles, California

(University of California, Los Angeles)

a. Kenneth Chen (*Chinese Buddhist History*)

(12) カリフォルニア大学・リバーサイド Riverside, California

(University of California, Riverside)

a. Frank Cook (*Sino-Japaness, Kegon*)

*(13) カリフォルニア大学・バークレー Barkeley, California

(University of California, Barkeley)

a. Lewis Lancaster (*Chairman, Mādhyamika*)

*(14) スタンフォード大学 Stanford, California

(Stanford University)

*(15) ハワイ大学 Honolulu, Hawaii

(University of Hawaii)

*(16) ワシントン大学 Seattle, Washington

(University of Washington)

a. Seyfort Ruegg (*Indo-Tibetan*)

B、カナダ

*(1) ブリティッシュ・コロンビア大学 Vancouver, British Columbia

(University of British Columbia)

a. Leon Hurvitze (*Sino-Japanese*)

b. Arthur Link (*Sino-Japanese*)

c. Shotaro Iida (*Indo-Tibetan, Mādhyamika*)

*(2) マクマスター大学 Hamilton, Ontario

(McMaster University)

a. Jun-hua Jan (*Chinese Buddhism, Kegon*)

(3) トロント大学 Toronto, Ontario

(University of Toronto)

(4) マクギル大学 Montreal, Québec

(McGill University)

以上北米全土で約二十の大学で仏教のプログラムが開講され、その中十三の大学が仏教専攻課程を有している。

イェール大学には中国仏教史学の大家 Arthur Wright 教授がおられたが、筆者がイェール大学を訪問する直前の昨年八月急逝され、現在は Stanley Weinstein 教授が主となって仏教専攻課程の学生を指導している。同教授は駒沢大学・東京大学に留学し、かつて駒沢大学で非常勤講師をされていたこともある。

ハーヴァードやイェールと並ぶ東部の名門コロンビア大学も、伝統的に仏教研究の盛んな大学である。筆者はコロンビア大学には行かなかったが、同大学には禅宗史研究で著名な Philip Yampolsky 教授がおり、『六祖壇経』の英訳 "The Platform sūtra of the Sixth Patriarch" (Columbia University,

1967）の著書がある。筆者は、カリフォルニア大学バークレーの Lewis Lancaster 教授とサンフランシスコ禅センターの主催する「中国とチベットにおける初期の禅」（Early History of Ch'an in China and Tibet）をテーマにした学会で同教授にお会いした。現在コロンビア大学の極東図書館長をも併任されている。日本語も堪能である。

中西部の仏教研究で代表的なのはウイスコンシン大学であるが、同大学の教授陣については次に詳しく紹介する。

西部になると比較的仏教研究者も多く、中国・チベット関係の若手学者の中には禅に関心を持っているものも少くない。中でも、カリフォルニア大学リバーサイドの Frank Cook 教授は、華厳経の研究で学位を取得されたが、近年は曹洞禅の研究をされている方である。カリフォルニア大学ロスアンゼルス（U.C.L.A）の Kenneth Chen 教授は、もとハーヴァード大学にいた方で、"Buddhist in China"（Princeton, 1964）の著書がある。カリフォルニア大学バークレーの Lewis Lancaster 教授は、同大学極東言語学科（Far Eastern Language Studies）の Chairman で、般若経の研究者であるが、禅にも関心を持っている。

カナダで仏教専攻課程のある大学は、U・B・Cとマクマスタ大学の二つだけであるが、同大学には中国華厳教学の研究者である Jun-hua Jan 教授がおり、同教授ともサンフランシスコの学会でお会いした。ここには、有名な "The Central Philosophy of Buddhism"（London, 1960）を著した Murti 教授がおられると聞いたが、最近の動向は不明である。

(2) 仏教研究のプログラム
―ウイスコンシン大学の場合―

それでは、実際に仏教研究のカリキュラムがどのようになっているのか、とくに仏教専攻課程について、ウイスコンシン大学を例にとって紹介してみよう。ウイスコンシン大学は、前述したように、北米大陸で最初に仏教の専攻課程が開かれた大学であり、伝統的に仏教研究の盛んな大学である。かつて、"Early Mādhyamika in India and China"（Madison, 1967）を著わした故 Richard H. Robinson 教授が中心となって一九六一年九月からこの課程がはじまったのである。前述した Shotaro Iida 教授、Lewis Lancaster 教授、Frank Cook 教授などは、いずれもウイスコンシン大学の同課程で、Robinson 教授によってPh・Dの学位を取得した人たちである。今日、ウイスコンシン学派とでもいうべき研究者たちが、北米各地の大学で活躍している。こうした伝統に支えられて、現在アメリカの大学の中でも仏教専攻の学生が最も多く、そのプログラムもよく整備されている屈指の大学である。

(A) 教授団

ウイスコンシン大学の Buddhist Studies を構成する教授団 (Faculty) は、南アジア学科 (South Asian Studies) の部局に属していて、そのメンバーと専攻分野は次の通りである。

氏名	専攻分野
Stephan Beyer	Buddhist philosophy and meditation (*Sanskrit, Tibetan, Chinese*)
Tse-tsung Chow	Chinese literature and cultural history (*Chinese*)
Minoru Kiyota	Buddhist philosophy and cultural history of South and East Asia (*Chinese, Japanese*)
David Knip	Religions of South Asia and methodology (*Sanskrit*)
Robert Miller	Buddhist organization ; South and Inner Asia
A. K. Narain	History and archaeology of Buddhism in South and Inner Asia (*Pāli*)
James O'Brien	Japanese literature and cultural history (*Japanese*)
Geshe L. Sopa	Indo-Tibetan Buddhist philosophy, culture and religion (*Tibetan*)
Frances Wilson	Buddhist and non-Buddhist literature of India (*Sanskrit, Pāli, Prākrit*)
Leonard Zwilling	Buddhist philosophical and religious literature (*Sanskrit, Tibetan, Mongolian*)

(B) プログラム

以上十名の教授団によって仏教専攻課程のプログラムが担当されるが、次にM・Aすなわち大学院修士コースで、具体的にどんなプログラムが組まれているか見てみよう。このプログラムは、South Asian Studies と East Asian Languages and Literature の講座として開講されているものの中から、Buddhist Studies のプログラムとして編成されたものである。コースは大別して次の三つの分野に分けられている。

Course I : **Language and Literature**

- Pāli (343—344)
- Buddhist Sanskrit (373—374)
- Readings from Pāli Literature and Early Buddhism (522)
- Readings in Chinese Buddhist Texts (425—426, 525—526)
- Readings in Chinese Buddhist Texts with Japanese Commentaries (725—726)
- Readings in Japanese Buddhist Texts (427—428, 527—528)
- Tibetan Literature (531—532)

Course II : **Doctorine and Philosophy**

- Introduction to Buddhism (364)
- History of Buddhist Thought (365)
- Religions of Ancient India (418)

Introduction to Indian Philosophy (463)
Survey of Buddhist Meditational Literature (501)
Buddhist Doctrinal Systems (592—593)
Seminar: Indo-Tibetan Buddhist Doctorine (864)
Seminar: Sino-Japanese Buddhist Doctorine (865)
Seminar: Buddhist Epistemology (920)
Seminar: Buddhist Logic (921)
Seminar: Research Methods and Source Materials in Buddhist Studies (925)

Course III: **History, Social Science and Culture**
Buddhist Iconography (334)
Buddhist Cult Practice (353)
History of Buddhism (405)
Buddhist Social Institutions (459—460)
History of Buddhism and Buddhist Institutions in India (480)
Problems and Methods in the Study of Religion (616)
The Culture of Buddhist Tibet (670)
Research Seminar in the History and Culture of Ancient India (860)

（ ）内の番号は、別に大学によって発行される社会科学と人文科学専攻の学生用の便覧（Bulletin）所載の講座番号で、たとえば

No.364 : Introduction to Buddhism

は Minoru Kiyota 教授の担当講座で、講義内容によればアジア、とくにインド・チベット・中国・日本における仏教の歴史、基本的教理、実践的徳目等について行われる講義で、いわば「仏教概論」に相当し、これは必修科目になっている。一年間に取得しなければならない最低単位は十八単位で、この中、(a)前記 No. 364 の仏教概論、もしくは No. 365 : History of Buddhist Thought（仏教思想史）のいずれか一つを選択必修しなければならないのと、(b) Reading（講読）の中から一科目、(c) Seminar（演習）の中から二科目を必ず履修しなければならないことになっている。大学院の基本的な制度自体は日本とそう変りはないが、十数名足らずの数少ない学生の割には、多彩な内容のプログラム編制になっている。

(C) 院生

こうしたプログラムに即応して、近年仏教専攻の学生の研究分野もきわめて多岐に渡っている。たとえば、筆者はウイスコンシン大学で親しく大学院の学生たちと懇談する機会を持った。すべて修士課程を修了し、現在博士課程に在学中の学生ばかりであったが、それは、次のような研究課題を持った諸君であった。

(1) Mr. Bill Grosnick　道元の仏性論の研究
(2) Mr. Jeff Hunter　浄土教学・大無量寿経の研究
(3) Mr. Wanye Gelfman　理趣経の研究
(4) Mr. Aron K. Koseki　三論教学・大乗玄論の研究

(5) Mr. Dennis Lishka　律蔵の研究
(6) Miss. Gu Zheng Mei　中国仏教の研究
(7) Mr. Steve Hamilton　パーリ仏教の研究

この中、Aron Ken Koseki 君は、昭和四十八年から二年間東京大学に留学した学生で、たまたま筆者が非常勤講師をしていたときの聴講生でもあった。吉蔵（五四九―六二三）の『大乗玄論』を英訳・註解したPh・Dの学位請求論文をこの春ウイスコンシン大学に提出した。筆者がマジソンを訪れた時は、丁度論文作成のため大学に帰っていた時で、彼が世話役となって院生諸君との懇談会を開いてくれたのである。また Bill Grosnick 君は道元の研究を志し、昨年の九月から東京大学に留学している。Dennis Lishka 君もかつて早稲田大学に留学し、平川彰教授の指導を受けた学生である。

これらの諸君は、前記したように、専攻分野も実に多彩であって、仏教の思想・教理的な面に対してもきわめて勝れた理解力を示し、アメリカの大学において、仏教、とくに中国仏教や日本仏教の本格的な研究が学生の間にもすっかり定着し、着実な社会の動きとなっていることを実感させられたのである。

三　大学生活

(1)　図書館

(A)　イエール大学

図書館が大学の勉学の中心であることは、洋の東西を問わず変りはない。しかし、その設備の立派さとなると雲泥の差がある。単純にその蔵書数を比較してみただけでも、北米大学中第二位（ハーヴァード大学が第一位）といわれるイエール大学の蔵書数は六五〇万冊である。駒沢大学の三十五万冊とは比較にならない。それに私立の名門であるイエール大学の学生数は八五〇〇人であるから、学生一人当りの蔵書数となると、さらに高い比率になる。

ここには、純日本関係の図書だけで三十万冊あるといわれている。ここの図書館の極東閲覧室に行くと、毎日航空便で運ばれて来るインクの香りも新しい前日付の日本の三大新聞を読むことができる。定期刊行物は勿論、学術書と名のつくものなら日本のどんな無名の学者の著書であっても、発行と同時に発注の作業が図書館事務局の手によって自動的（?）になされている。中央図書館は Sterling Memorial Library と名づけられ、全蔵書数の約半数を収蔵しているが、ほかに Cross Campus Library と呼ばれる地下図書館があり、参考図書やよく使われる図書が集められている。これは、学部の

一般学生のための図書館で、約十二万五千冊の図書がすべて開架式で閲覧することができる。七五〇の座席と、学生の勉学のためのキャレルやロッカーがある。イエール大学の図書館でとくに特徴のあるのが、一九六三年に設立されたBeinecke Rare Book and Manuscript Libraryで、ここには四十五万冊の貴重本と、百万点以上の写本が収められている。

(B) U・B・C

ハーヴァード大学やイエール大学というのは、大学の予算が国連の総予算を凌駕するといわれる、財政規模の巨大な超一流大学であるから、あまり参考になる話ではないが、普通の州立大学であるU・B・Cの場合はどうかというと、U・B・C図書館の全蔵書数は百五十万冊。Main Libraryのほかに、十二の独立のBranch Libraryがあり、この中にはCrane Libraryという盲人用の図書館やSedgewick Undergraduate Libraryという学部学生専用のユニークな地下図書館などがある。そのほかに約五十のDepartmental reading roomがあるが、これはいわば各部局に附属する図書室である。図書のほかにL・Pレコード、地図、マイクロフィルム等のNon book item二百万点を所蔵している。

アジア関係の図書は、中央図書館の一画にあるAsian Studies Divisionに収められ、通称これをAsian Libraryと呼んでいる。蔵書数は約十八万冊で、司書の話によると、アジア関係の図書では、北米全大学中第十二番目にランクされるということであった。中国関係の図書が半数以上で、日本関係では文学と歴史が多く、仏教書の収集はこれからである。アジアセンターの新設とともに、仏教書についてもその飛躍的な充実が期待されるところである。

(C) シカゴ大学

蔵書数からいうと、イエール大学とU・B・Cの丁度中間の三五〇万冊を所蔵しているのがシカゴ大学である。筆者は、シカゴ大学では専ら図書館の見学視察に費したので、アメリカの大学の代表的な図書館の例として、シカゴ大学について少し詳しく紹介してみよう。ここのMain Libraryは一九七一年に完成した最新の建物で、設備的にも機能的にも最も優れた図書館の一つである。中央図書館のほかに十七のBranch Libraryがあるが、最近の大学における図書館活動の一般的傾向にもれず、ここでもその機能は中央図書館に集中する傾向がある。十七のブランチの中では、一八九〇年に創立された、初代総長Harperの名を冠したHarper Libraryが最大で、現在、学部の学生専用の図書館になっている。

極東関係の図書は約三十万冊で、その中、中国関係が二十一万冊、日本関係が七万五千冊で、残りが朝鮮その他である。イエール大学の日本関係の図書三十万冊に比べると大分劣るが、これは日本関係の図書収集の歴史が浅く、一九六〇年代

に日本文学関係のものが集中的に集められ、仏教書の収集も、本格的にはじめられるようになったのは近々十五年ぐらいに過ぎないからである。むしろ、ここの図書館の極東部門の特色は、中国の古典や歴史関係の図書がよくそろっていることである。ことに地方誌と伝記が多く、地方誌は完璧である。また、叢書の種類が多いことも特徴である。サンスクリット関係の文献は、これとは別に South Asian Collection として別の階に収納され、ほとんど完璧に近いものを所蔵し、全米でもトップクラスといわれている。極東学科（Far Eastern Studies）の専門課程の学生数の比率も蔵書数に比例して、たとえば博士課程の専攻別でみると、中国学が三分の二、日本学が三分の一である。仏教研究のプログラムも極東学科に含まれているが、日本学、中国学いずれの場合も、仏教専攻の学生はそう多くはない。

最新の設備にふさわしく、図書館活動も活発で、Main Library は午後十時まで、Harper Library は午前一時までオープンしている。研究室とは別に、教授専用の閲覧室（個室）が二五〇室もあり、教授の研究に対するサービスも行きとどいている。こうした図書館活動を支えているスタッフの数も多く、フルタイムの職員四三〇人、パートタイムを入れると六三〇人の職員が昼夜交代で働いている。（駒沢大学図書館の職員数は三十五人）日本人のスタッフも九名おり、極東部門の一チームを構成し、ヘッドは一九七三年から立正大学とウイスコンシン大学を出た田中一雄氏である。駒沢大学の場合、和洋の遂次刊行物（雑誌）の購入はおよそ二千三百種類であるが、シカゴ大学の場合、全世界から約二万種類の雑誌が購入されている。日本関係の定期刊行物だけでも約九百種に及んでいるという。学問の分野別に各階が分れ、各階ごとに書庫と閲覧室を備え、閲覧室はそれぞれカーペットをはじめ色彩で区別され、インテリアにも様々な工夫をこらしている。こうした最新設備の図書館の中に身を置いていると、つくづく、図書館が大学活動の中心であることを実感させられるのである。

(2) 学生生活

(A) スチューデントユニオン

図書館が大学における研究生活の中心であるとすると、学生の福祉厚生面の生活の中心がスチューデントユニオン（学生会館）である。アメリカの大学で、学生会館や学生寮の設備が格段に立派なのは、概して、大学が自宅通学の不可能な郊外の広大なキャンパスの中にあるために、快適な生活の場としての条件が要求されるからであろう。

U・B・Cのユニオンも、文字通りキャンパスの中央に位置して、一目で分る最も大きく立派な建物である。地上三階、

地下一階の建物の総床面積は約五千坪にも及ぶ。一階は千人以上収容できるカフェテリア形式の大食堂と、広広とした静かなロビーが主体である。食堂は午前七時にはじまって午後七時で閉じてしまうが、ロビーは深夜まで開放され、深深としたソファでバックミュージックを聞きながら読書に耽ったり、談笑する学生たちの姿を見かける。ロビーと食堂を区切る中央の廊下にはハウジングの相談から海外旅行の代理店まで、学生に必要な生活情報を提供するサービス機関が出張っている。二階以上には学生の自治活動に必要な中枢機関が置かれている。百以上の各学生クラブの本部室があり、学生たちのカウンセル・ミーティングのための円型会議場や講堂、学生新聞や学内放送のための諸施設などのすべてが収容されている。地下一階は、銀行や食料品店、雑貨店、本屋等の各種売店のほかは、あげて学生たちの娯楽施設にあてられている。そこにはボーリング場からビリヤード室、ピンボールマシン等のゲームセンターまである。また、デイスクに合わせてゴーゴーが踊れるだけの、たっぷりしたホール付きのパブ（酒場）があって、午後十二時まで開いている。U・B・Cの滞在期間中、筆者が最もひんぱんに利用させて貰った施設の一つである。キャンパスの中にはユニオンのほかにも大小いくつかのレストラン、カフェテリア、銀行、郵便局、売店等の施設があり、また、大学院生には、これとは別に大学院生専用の学生会館があり、少くとも福祉厚生の面では、生活の場としての必要かつ充分な条件が満たされているのである。

(B)　学生寮

アメリカの大学の中でも、イエール大学などは、英国のケンブリッジ大学やオックスフォード大学を模して創られた大学であるから、カレッジ組織になっているために、教養課程の学生はすべて全寮制である。こうした制度として全寮制を採っていなくても、アメリカの大学の多くはその立地条件から例外なく学生寮が発達している。U・B・Cのキャンパスは広大であるが、三路線のバスがキャンパス中央まで乗り入れており、とくに down town と結んでいる路線は回数も多く、午前五時から午前三時まで運行されているから、ほとんど終夜運転である。down town まではバスで三十分、バンクーバー市内に住んでいるものにとっては通学はきわめて便利である。また、カナダはアメリカ以上に車社会の国であるから、車で通う学生も多く、広大なキャンパスの至るところに駐車場がある。にも拘らず、U・B・Cにはカナダ国内やアメリカから来ている学生も多く、北米の他大学と同じように、立派な学寮設備がある。

U・B・Cの学生寮は、二つの地域に分れていて、一つは Totem Park Residence と称するもとからある寮で、トーテム公園近くの景勝の地に散在する四乃至六階建ての建物数棟

である。もう一つは、Walter H. Gage Tower と称する三年前にできた寮で、学生会館の近くにそびえる十七階建ての超近代的な建物三棟である。筆者が滞在したのは後者で、各階A・B・C・Dの四コーナーにそれぞれ六室がセットになっていて、浴室、洗面所、応接室、台所を共有している。日本の学寮の雑然としたみすぼらしいイメージとはほど遠く、文字通りホテル並みの清潔な設備の良さである。なお、ここには Meeting Room や Convention Hall もいくつかあり、各種の会議に利用されているのもホテル並みである。夏期休暇中は両方の寮とも一般に開放され、五月の世界環境居住会議や、六月の世界婦人会議などの国際会議の際には、各国代表団の宿泊施設としても利用されていた。八月になると、観光業者によって組織動員された日本からの英会話学校の留学生が大挙して三千人も押し寄せ、U・B・Cの寮を埋めつくすという。不幸にして筆者は、その壮観なU・B・C名物を見ることなくここを退去したのである。

(C) 学生と教授

素晴しい環境の中で、ゲームセンターから酒場まで、ないものはない至れりつくせりの立派な設備（?）を与えられている学生を見ていると、これで一体学生は勉強するのだろうかと、余計な心配まで出てくる。研究室まで三人詰という超過密のキャンパスで、文字通り切磋琢磨してきた Japanese Professor にとっては至極当然な疑問であった。アメリカの大学は、入るのはやさしいが出るのはむつかしい、とはよく聞くことである。事実U・B・Cでも入学試験は高校の内申書に英語の試験があるだけである。英語は移民の多い国であるから講義を聴講できるだけの語学力があるかどうかを試す資格試験のようなものである。しかし入学してからが大変で、二年度に進級するとき約三分の一の学生が落第させられるという。これは学生が怠けているから落第するのではない。この数は少し割引いて考える必要がありそうな気がするが、事実、必修科目と試験が多く、中間・期末の試験のほかにペーパーを書かせられることが多く、単位をとるのに精一杯というのが実状のようである。日本もアメリカも、大学の大衆化という点では今日あまり変りがないが、どうやら教育内容の質的な厳しさという点においては大きな相違があるような気がする。

このことは、むしろ教授の側において一層はっきりしているように思われる。なぜならば、彼らの間では厳しさということは日本のように教師から学生への一方通行ではないからである。学生もまた教授を（制度として）採点することができるのである。学期末に全学生が自分を教えている教師一人一人について行うエバリューション（evalution）（勤務評定）がそれである。Evalution の具体的な項目内容はそれぞれ大学に

よって異なるが、制度としてはアメリカのどの大学にもある。たとえば、講義が分かりやすいか、テキストに準拠しているか、学生の質問に十分の答えをしているか、学生との相談の時間を十分にとっているか、etc, etc。こうした点について三十項目以上もの評価をする大学もあると聞く。そして、はなはだ都合の悪いことにこれが一年ごとの大学との契約更改や、昇進、さらにはテニア（tenure）（教授の終身雇用制）の決定に重要な参考資料になることである。もちろん学生の評価だけがすべてではない。U・B・Cで、一年毎に繰り返される契約更改の残酷な試練に堪えて、数年後にめでたくテニアになったある教授の話を綜合すると、昇任やテニアの決定には次の三つの条件を満たさなければならないという。すなわち Paper（研究業績）と Public Service と Teaching である。今、前二者はしばらくおいて、最後の Teaching に関していえば、ことにテニアが問題になっている教師についてはまず適当な期末の一時期に、学部長（Dean）と学科長（Chairman）と教室の主任教授と、この三者による教場における講義の視察・査定がある。そして講義半ばにして退場させられたあとは、この三者による学生たちのエバリューションの聴取がはじまるのである。かくて前記三条件の総合判定によって、最終的にテニアになるかならないかが決定されるのである。（どうやら、皮相的で無節操な北米大学礼讃の報告になりかねなかったこのレポートも、ここへ来てやっと、大きな声で心置きなく日本の大学を、讃美することができるというものである。）

それでは、北米の大学では、教授と学生は、まさに不倶戴天の仇どうしなのかというと、どうやらそうではなさそうなのである。研究と教育と、今一つ忘れてならないのが懇親で、この三つが大学生活の三本柱であるとは、これもよくいわれることである。事実、筆者も、各地の大学でしばしば招かれて教授宅で催される各種のパーティに参加する機会を持った。その際必ずといっていい程、学科長や主任教授、同僚教授たちと一緒に、学生たちをも招待するのである。中には夫人同伴で仲よくやって来るのもいる。あるときは夏の夕暮れのガーデンパーティでバーベキューに舌鼓を打ちながら、あるときは夜の更けるまで応接間でカナディアンやスコッチを飲みながら、教授たちとディスカッションしていた学生たちの楽しそうな姿を忘れることができない。こういう形での大学生活における懇親の実はわれわれにはない。なぜならば、そのためには大学教授たるもの、最低三百坪のきれいに刈り込まれた芝生付きの宏壮な庭を持ち、高級スコッチを常時山程ストックして置かなければならないからである。しかしわれわれには、たとえ学部長や学科主任が同席しなくても、大学の周辺に無数にある red lantern の下で、お互いに肩を寄せ合って、高級ホワイトリキュールを酌み交しながら教育の原点で

あるスキンシップを確認することができるという、最大限に恵まれた教育環境があるではないか。したがって、あれこれ彼我の違いを論じてみても所詮それは意味のないことである。結局、彼我の大学生活における最大の相違点は、過疎と過密の論理の違いだけではないか、そんな気がしきりにしてならないのである。これが両者のキャンパスの広さを比較することからはじまったこのレポートの唯一の結論である。

―終―